原始ヶ原湿原

斎藤　実

一、はじめに

生まれが草深い田舎のせいか、私は山が好きで、子どもの頃から方々の山々を歩るき廻ったが、とりわけ高層湿原の神秘に満ちたふんい気とその美しさが忘れられない。

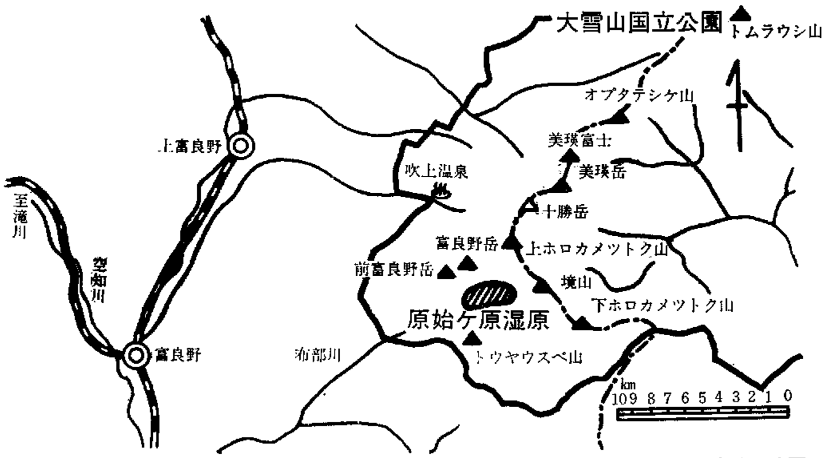
湿原全体があたかも時計皿を伏せたように中程の部分がうっすらと高くなり、その上には池溏と呼ばれる、月面の噴火口のようにへりがもり上がった、しかもそれぞれの水位が一つ一つ違っている。高層湿原特有の池沼が存在する。―これら池溏の水は地下水ではなく雨水によって涵養されるところに特徴がある―時には小凹地(Schlenken)と呼ばれる小さな水溜りと小凸地(Bulten)と呼ばれる小さな隆起がいくつもいくつも交互に、湿原いっぱいに広がっていることもある。―このような小凹地と小凸地ができるのは、高層湿原という独特の地帯を構成する植物群落それぞれの水分に対する要求が異なるためにできるものと考えられている―そして、そこにはうすもいろの小さな花をつけたヒメシャクナゲ、ツルコケモモの可憐な姿、あざやかな紫のヤチギボウシ、ヒアフギアヤメの優雅な姿、風にそよぐワタスゲ、サギスゲの白い波が見られるのである。さらに、これらの湿原が次第に乾燥し、陸化が進むとアカエゾマツの曲がりくねった緑の姿も点々と見られるようになり、やがてそこは森林に変っていくのである。

高層湿原はただ美しいだけでなく、湿原自身がもの語るきわまりない植物相の変転がある。高層湿原は夏の気温が低く、多湿でしかも貧養、酸性、水はけの悪い凹地に多く見られる。ミズゴケ類が主要な構成要素で、これにヒメシャクナゲ、ツルコケモモ、ホロムイスゲ、イヌノハナヒゲ、ミカズキスゲ、ゴウソなどの比較的酸性に強い植物が加わり、これらの物が何千年にもわたって栄枯盛衰をくり返して、次第に厚い泥炭層を構成するようになるのである。そして、これら泥炭層の構成も進行、停止、退化がくり返される。しかも、それが部分的に異なるために植物群落の様相も複雑化し、生態学的立場から特異な群落を形成するようになるのである。北海道のように火山の多い地域では、火山の中腹部の平坦地には高層湿原が発達しやすい条件がそなわっている。羅臼岳知西別湿原、上川郡浮島湿原、大雪山沼ノ平湿原および三ノ沼湿原、雨竜郡雨竜沼湿原そして富良野岳原始ヶ原などはみなこのよい例である。

わが国における代表的な高層湿原としては群馬、福島、新潟の三県にまたがる尾瀬ヶ原と長野県の霧ヶ峯が知られているが、特に尾瀬はその規模、貴重な生物相、数多くそして種々の発達段階が観察できる池溏、湿原などを有することで有名である。

高層湿原はただ美しく、めずらしい植物相をもっているだけではなく、それはまた天然の巨大な貯水槽でもある。つまり吸水細胞が発達しているミズゴケ類は、通常乾燥時の重量の十数倍、種類によっては数十倍もの水分を吸収保持することができるので、ミズゴケ類の厚い層からできている高層湿原は、山はだに降りそそいだ雨水を、ひとまずここにたっぷりと蓄えて、それから徐々に吐き出すということになるのである。原始ヶ原湿原も雨竜沼湿原も、もしこれらの湿原がなかったら、湿原から流れ出している布部(ぬのべ)

川、ペンケペタン川の下流は大雨のたびごとに洪水に見舞われ、見るかげもなくなってしまうであろうことは想像にかたくないのである。本当に自然とはよくしたものと、つくづく思われてならない。ここにも美しさのかげに、少なくとも私達の生活の安定に一役かっておりながら、しかも大方の人にその名すらも知られていない小さな生命の集まりがあるのである。私が高層湿原にひかれるのもその美しさよりも、ひっそりとしたこれらものいわぬものへのあこがれかも知れない。



原始ケ原附近の略図

二、原始ケ原の概観

さて、原始ケ原湿原であるが、国鉄根室本線・富良野駅下車、富良野市の東方にある麓郷、布礼別の市街を経てペルイの部落で路を右に折れて山に向うと、二kmばかりで布部川に沿ってつけられた林道にさしかかる。そこからさらに六km、比較的ゆるやかな道をだらだらとのぼりつめていくと、やがて滝につき当り道は一応行き止まりになる。この滝を大きく巻いて上に出るとそこが原始ケ原の入口である。北海道大雪山国立公園内の十勝岳火山群の一環をなす富良野岳(一九一二・二m)の南側、海抜一〇〇〇m－一二〇〇mあたりの山麓地帯に位置し東西二・八m、南北一・六kmにわたって広がっている湿原である。周囲は富良野岳をはじめ前富良野岳（一六二四m）、上ホロカメットク山（一八八七m）、境山（一八三七・三m）、下ホロカメットク山（一六六八m）、トウヤウスベ山（一四〇七m）などにかこまれ、それらの山々の裾野が合わさったようなかっこうで、でき上がった一面の山麓面で、安山岩を基盤とした凹地に発達し、西方は布部川によって開通している。このような地形は燧岳（二三〇〇m）、景鶴山（二〇〇一m）、大白沢山（一九四二m）、スス ケ峰（一九五五m）、目崎山（一八一六m）、至仏岳（二二二八m）、荷鞍山（二〇二四m）などの高山に囲まれた海抜一四〇〇m、東西四km、南北二kmにわたる尾瀬ケ原湿原とよく似ている。もっとも、高層湿原の成立は地形やその他の条件と密接な関係があり、さらに高層湿原特有の形態は植物群落によって形成されるので、多くの類似点をもつようになるのは当然である。

原始ケ原湿原はかなり厚いミズゴケ類の層で被われているが、全体としては陸化が進んでいるものと思われ、それにつれて湿原内侵入林の発達が著しく、これらの森林によって湿原は大小一〇余個の斑紋状に区画されたような状態になっている。

原始ケ原湿原がどのようにしてできたかはなかなかむずかしい問題であるが、一応次のような推察を試みた。すなわち、当初の富良野岳の火山活動は、現在の布部川の上流部分（前述の滝のあたり）をせき止めて原始ケ原の前身沼を形成した。その後、布部川のせき止めの進展と、さらに幾度かの火山活動により次第に土砂が堆積せられ、前身沼は漸次その深さを減じ、ついには多くの浅い小沼として点在するにいたったものであろう。この原始ケ原に発達する森林もこの地区における先駆者ともいうべき存在で、点在する小沼を囲んでまず出現してきたものではなかろうか。その後、この森林を本拠として小沼が次第に湿原化し、ことに富良野岳の側面を下る雨水は大雨のたびごとに多量の土砂を洗い流し、下方にゆるやかな傾斜面をつくり、植生と相まって湿原の陸化をいっそう進展させる結果になったものと考えられる。だから、原始ケ原全体が富良野岳側からトウヤウスベ山の方向に向ってゆるやかな傾斜になっていて、富良野岳側の傾斜面には、あたかも、かつて段々に田んぼでも存在していたかのような状態の植生―植物生態学上、田の痕跡とよぶ―がほとんど全面にわたって階段状をなして見られる。しかし、トウヤウスベ山側の湿原は小凹地と小凸地が錯雑し、八〇余個の池溏の大部分はこの地

域に見られ、二、三の時計皿を伏せたような高層湿原特有の著しい隆起も認められるのである。

三、原始ケ原の植物相

(一) 針葉樹林帯(アカエゾマツ—ネマガリダケ群落)

五m以上にも大きくのびたアカエゾマツとそれにわずかなトドマツが混じった針葉樹林が、斑紋状に点在する湿原の周囲をとり巻いて帯状に発達し、あたかも一〇余個の濃緑の輪ができ上がっているみたいである。北海道の中央高地においては、海抜一〇〇〇m——一二〇〇m付近の気候的極相はダケカンバ群落であるが、ここではアカエゾマツが土壌的条件から極相をなしているものと思われる。もちろん、二〜五mぐらいのタカネナナカマド、オガラバナ、ムラサキツリバナの姿もところどころに見られ、コヨウラクツツジ、エゾクロウスゴ、ハナヒリノキ、ミヤマホツツジ等の潅木もまじっているがなんといっても人の丈以上にものびたネマガリダケが相当なもので、典型的なアカエゾマツ——ネマガリダケ群落を形成し、構成一様な様相を呈している。また、主に林縁部に近いほうにミズギボウシ、ミズバショウ、コバイケイがわずかながら残存し、ウツクシミズゴケ、キダチミズゴケとともに過去の湿原の森林化のあとをもの語っている。

湿原の森林化の第一歩を印すものは、ここではアカエゾマツであり、湿原の乾燥、陸化につれて飛石のように湿原の中央部まで侵出して、長年月の間にその勢力を拡大していくのである。わずか一〜二mのものにおいてさえ、一〇〇年近くの年輪を数えることができる。休止期の小凸地の乾燥が進むと、このようなところでは小さなアカエゾマツの根元を中心に、イボミズゴケもしくはスギバミズゴケ(時にはこれにアカミズゴケが加わることがある)がもり上がり、さらにアカエゾマツの幹をはうようにして上昇し、ミズゴケの山は次第に大きくこんもりとしてくる。ついでヌマガヤが加わり、ヒメシャクナゲ、ツルコケモモが多くなり、さらにササ、エゾクロウスゴ、オオバスノキ、イヌツゲなどの侵入も始まり、これらが一つの島を作り上げる。この飛石のような島が、やがて一列の帯状に連なるようになるのである。

(二) ダケカンバ帯(アカエゾマツ—ダケカンバ—ネマガリダケ群落)

一〇余個の湿原の周辺に輪状をなしている針葉樹林帯を除けば、あとは大部分がダケカンバ帯になる、しかし、ダケカンバよりはアカエゾマツが多く、トドマツもまざって針闊混淆林を構成している。五m以上にものびたこれらにまじって、五m以下のタカネナナカマド、オガラバナ、ムラサキツリバナなどの亜高山帯から高山帯に本拠をもつ闊葉樹がみられるが、このクラスのダケカンバは全然なくまた、稚樹も認められない。すなわちダケカンバはやがてこの地域から駆逐されてしまう運命にあり、いつかこの地域もアカエゾマツ—ネマガリダケ群落に変っていくものと考えられる。蘚苔層ではタチハイゴケが多く、イワダレゴケ、フジノマンネンゴケがこれについでいる。これらは、いずれも本道中央高地で亜高山帯の針闊混淆林に広く分布しており、これらの量の多いことは森林の熟度のかなり古いことをもの語っている。

(三) 湿　原

一〇余個の斑紋状をなしている湿原は、ミズゴケ類が厚い層をなして全体を被っている。しかし、富良野岳側の緩傾斜面の陸化の進んだところでは、田の畦の跡はヌマガヤを主としてナガボノシロワレモコウ、ミタケスゲ、イヌノハナヒゲをまじえ、特にヌマガヤの被度が著しく)状の斑紋群落をなしている。その他の部分はチングルマが多いが他の植物の被度は少なく、時には地肌さえも見られスナゴケが団塊状になっているのが見られる。つまり、陸化の最も進んだこの種の傾斜面では田の畦はヌマガヤ—ナガボノシロワレモコウ群落であり、その他はヌマガヤ—チングルマ群落である。

トウヤウスベ山側の湿原においては小凸地と小凹地が交雑し、小凹地の大部分はちょ水しミタケスゲ、ミカズキグサが著しく、またホロムイスゲ、ゴウソも多い。休止期の小凸地の上には主として、ヌマガヤ、ツルコケモモ、ヒメシャクナゲ、マルバモウセンゴケが見られる。前記、傾斜面との中間地帯とも考えられる、やや平坦地においてはヌマガヤ、イヌノハナヒゲ、ニッコウキスゲ、ワタスゲ、ショウジョウバカマが主である。再生期の小凸地上にはホロムイスゲ、ミカズキグサ、ツルコケモモが主体となる。ミカズキグサはやや水のあるところ(二—一〇cm)が最も優占的であるが、かなり広い生育範囲をもち、陸化の進んだところでも相当多く見られる。

さらに、原始ケ原の東端に位置し、時計皿を伏せたような隆起の最高部にある、五段沼と名づけられている池溏の周囲は、ヌマガヤ、チングルマが主であり、アカエゾマツ、エゾイソツツジ、コヨウラクツツジ、ササ等の侵入も始まっている。後述するが池溏中の水生植物はオヒルムシロ、ササエビモが最も広く分布している。原始ケ原湿原におけ

る陸化に伴う群落の更行は、ほぼ次のように想像される。

オヒルムシロ―サヤエビモ群落→ミタケスゲ―ミカヅキグサ群落→
↓ヌマガヤ
ホロムイスゲ群落
↘ヌマガヤ―ナガボノシロワレモコウ群落
↓ヌマガヤ―チングルマ群落
↙ヌマガヤ―ミズギボウシ群落
↓↙アカエゾマツ
↘ネマガリダケ群落

(四) 湿原の蘚苔層

一〇余個の斑紋状の湿原にはスギゴケがイボミズゴケの中にまじって諸所に存在しており、その他フデゴケ、シッポゴケ、スナゴケ等が見られたが余り著しくはない。ミズゴケ類は一二種を上げ得たが（尾瀬は二一種）そのうち八種は尾瀬と同一種であり、特にイボミズゴケ、アオモリミズゴケ、アカミズゴケ、キダチミズゴケ、スギバミズゴケの五種は尾瀬と同様、高層湿原の主要構成要素として分布している。

(五) 池溏の水中植物

この湿原には、径二m以上の池溏が八九個存在する。最大は五段沼であり、隆起の最高部に位置し径五〇mに及んでいるが、その他は余り大きくはない。水深は一・六mに達するのは五段沼だけで他は、〇・四―一・二mの範囲にとどまっている。八九個の池塘中四九個は水生植物（種子植物）を有しておりオヒルムシロ、サヤエビモ、コミクリ、ヒメタヌキモの四種がそれで、このうち、オヒルムシロの分布が最も広く三九個の池塘の中深〇・四―一・二mに生育し、池溏の湿原化の先駆者と考えられる。

原始ケ原湿原及び尾瀬ケ原湿原に於ける温度の比較

	原始ケ原 1952. 8月上旬. 20ケ所	尾瀬ケ原 1950. 7月下旬. 20ケ所	平均温度の差
地表	15.2～27.0 (20.0)	21.5～28.0 (25.0)	5.0
地下 10cm	14.8～23.5 (17.3)	19.5～23.5 (21.0)	3.7
地下 30cm	12.9～19.0 (15.7)	18.5～23.0 (18.6)	2.9
海抜高	1000～1200m	1400m	
pH	5.4～6.1	5.0～5.4	
出現植物種数	45	63	

（　）は平均温度

水中の蘚苔類はホソヤナギゴケ、ヒシャクゴケが泥炭谷（Rüllen）――高層湿原の隆起部をめぐって見られる小排水溝で幅の割合には深さが深く、先頭部分は泥炭層から水がにじみ出しているような形態をとっている。あるところまでは、幅が最初からほとんど変化しないのも特徴の一つである――の流水中に見られただけである。

なお、駄足になるが原始ケ原と尾瀬の両方で地表、地中の温度を調べたことがあるのでその表を上げておく。いずれも両湿原の間には、かなりの差がある。そして測定した二〇カ所に出現した植物種数はそれぞれ四五種、六五種で、原始ケ原は尾瀬のほぼ三分の二である。尾瀬の方が酸性度も強く、標高も高いが出現植物種数の多いことは、その主要原因が地中温度にあるのではなかろうか。

以上、原始ケ原湿原についてその概略を述べたが、かなり以前の記憶をたどっての記述なので、誤りも多いことと思う。ご叱正をいただければ幸いである。

ただ、原始ケ原は尾瀬ほどの規模も、珍奇さもない。それだけに余り人にも知られず、いつもひっそりと静まりかえっている湿原なのである。だから私は、余計にひかれるのかも知れない。

（北海道教育研究所）